

令和6年度第2回神戸市政調査会議事要旨

日時：令和6年9月9日（月曜）

13時から15時

場所：市役所1号館14階大会議室

委員出席者（あいうえお順）

織田澤 利守 神戸大学大学院工学研究科教授
加藤 正文 株式会社神戸新聞社編集局経済部長、特別編集委員・論説委員、
大阪支社編集部長
鴻巣 玲子 大阪学院大学国際学部教授
品田 裕 神戸大学大学院法学研究科教授
谷口 真澄 神戸市行財政局参与
灘本 明代 甲南大学知能情報学部教授
村上 あかね 桃山学院大学社会学部教授

神戸市出席者

久元 喜造 神戸市長
辻 英之 企画調整局長
三重野 雅文 地域協働局長

1. 開会

2. 議事

（1）神戸市における地域協働の取組み

○三重野雅文地域協働局長

地域協働局は昨年度新設された。地域協働局には、地域課題の多様化・複雑化、労働人口減少を受けて、様々な主体の協働参画によって地域課題を解決する仕組みづくりが求められている。

社会意識については、SDGs・サステナビリティ社会への貢献といった意識の高まりの影響を受けて、社会の役に立ちたいと考えている人が64.3%いるという内閣府の調査結果がある。本市においても地域貢献団体やボランティア参加者も増加しており、意識の高まりはあると感じている。また、市内23大学・短期大学のうち17校が専門窓口を設置している。

神戸市のネットモニターのアンケートで、「地域活動に参加したことがない理由」を質問した結果、1番は「時間がない」であったが、2番目・3番目には「きっかけがない」

「何をやったらいいかわからない」という結果が出ており、やりたい気持ちはあるけども、何をやったらいいかわからないと感じている方が多い。

地域に貢献したい、役立ちたいという市民・団体・企業の想いを伴走型で支援して実現をするという窓口である「地域貢献相談窓口」を5月9日に地域協働局内に設置した。8月末時点の受付件数は73件あり、そのうち36件を伴走的に支援している。団体：企業：個人・学生の比率は、およそ1：1：1。

地域貢献活動のマッチング促進事業で「ぼらくる」というマッチングするシステムをつくっている。月間1万PVある。今後、団体や個人の登録も増やしていきたい。

地域課題に取り組むNPOの補助制度は運用を始めて今年で3年目になる。令和6年度は182団体に当該補助金で支援をしている。

紹介した取組みを進めつつ、多様な主体の参画によって、神戸市の持続的な地域活動、地域社会を実現するため、地域活動へのスムーズな参画・地域内外の団体同士の連携のサポートを行うほか、そのなかで行政に求められる新たな役割についての議論も進めている。

(質疑応答・提案)

○委員発言

大学のゼミの一環として取組んでいると学生が入れ替わっても、どんどん次の時代につながっていき、持続可能になっていくということを実感されているという話がある大学の先生より聞いたことがある。

また、地域からは企業・大学生だけではなく高校生の参加もありがたいという意見を聞いている。うまく区役所も一緒になって、高校を巻き込むことができればいいのではないだろうか。

○委員発言

学生の「社会貢献する」意識が非常に下がっていると思う。能登半島地震では学生ボランティアの数が少ないと聞く。社会活動をしている暇も、金も、余裕もない。それは日本国全体の劣化かもしれないが、その点について感想があれば。

○三重野雅文地域協働局長

私は真逆のイメージを持っている。意識の高い人にだけ偶然会うことが多いのかもしれないが、能登半島地震の被災地支援に対して、神戸市が補助金を出す団体を募集したところ、神戸大学・甲南大学・関西学院大学の学生団体に手を上げていただいた。社会貢献したいという潜在意識を持っている学生は最近増えているので、そのような学生に「ぼらくる」に登録していただいて、社会貢献したいという想いを持つ人を応援していきたい。

○委員発言

確かにボランティア・ボランティアプログラムに参加する学生は減っている。要因はいくつかあるが、まずは学生が授業で忙しい。さらに、就職活動が早期化している。一方で就職が非常に決まりやすい。そのため、就職活動でボランティアに力を入れたことを PR する必要がなくなった。

授業との連携も学生には好評ではあるものの、学生のマナー低下が教員としては気になる。受け入れ先に失礼があってはならないというプレッシャーを感じる。

「ぼらくる」の Facebook ページがない。Facebook は学生の親世代にはリーチする。活動の写真があればイメージできる。内容・やり方が分からないと怖いからやらないというのが若い人の感覚。

○三重野雅文地域協働局長

まだ始まったばかりで、活動報告までに至っていない。「ぼらくる」も、「地域貢献相談窓口」も今後活動報告の PR をしていきたい。

○委員発言

ネットモニターのアンケートで、地域活動に参加したことがない理由で「きっかけがない」「都合がつかない」という理由が多かった。しかしこれは、表裏一体で、暇だからといって行くわけでもないし、忙しくても行きたければ行く。どちらとも取れる。なので、実際は参加にためらうような事例が背景にあるのではないかと考えている。6 番目に「人間関係が心配、煩わしい」とあるが、1 回参加してしまうと抜けられないイメージがあるのではないかと考えている。関係でつながっているネットワークの方々には思いが強い人が多い。なので、きっかけがあれば入るけど、あまり長くはやりたくないという人が、まさにターゲットになるのではないかと考えている。川崎市では、プロボノを進めている NPO 法人を仲介役に、行政側はやりたい人と助けてほしい人をつなぐための場を用意する活動を 7、8 年ほど続けている。フックがあれば引かかるような人たちが、若い世代には多いと思う。

○委員発言

社会貢献の意識はあっても、ニーズの情報が分からないと、何か自分ができないようなことを頼まれてしまうのではと不安に思う人がいるのでは。ニーズのメニューがそろっているといいのかなと思う。

○三重野雅文地域協働局長

「ぼらくる」では、各団体の活動地域や内容、どういう人が足りないといった情報を掲載し、それを見たうえで申し込んでいただくようにしている。

○委員発言

理系学部はボランティアについて考えが及んでいない。今までの話を聞いて、理系だからこそできるボランティアもあるのではないかと感じた。大学評価でも地域（社会）貢献の項目があるが、理系の教員はどこまでが地域貢献に該当するのか戸惑いながら評価しているところがある。データをもらって分析するなど、お互いがウィンウィンになるボランティアをぜひ神戸市との連携により進めていきたいと思う。

次に高校の話が出たが、高校が探究のテーマ設定に困っている。ボランティア的な要素を含んだ探究テーマを高校に持っていくと、非常に喜ばれるのではないかと。

○久元喜造神戸市長

地域貢献相談窓口は、誰かの役に立ちたいと思っておられる方と参画を待っている NPO・地域団体をつなぐものとしてつくった。それらをつなぐ中間団体的な NPO は当然あるが、このアプローチには様々なアプローチがあっている。あえて直営でやっているのには理由がある。これまでは神戸市の組織は大きく、縦割りであり、地域貢献の相談をしても対応してもらえなかった。そこで、一元的窓口をつくり、地域貢献相談窓口の地域協働局もこれを機会に各局といろいろと情報交換をし、知らない情報を提供したり、あるいはもらったりするという庁内の活性化にもつなげていくということを一つの目的にしている。

人間が一番幸福を感じるのは、自分が誰かの役に立っていることを実感できたとき。今日は幸福度の低さを議論していただくことになるが、それにもつながるような取組みではないかと話を聞いている中で感じた。

個別の質問をいくつか。理系の学生がボランティアに関心がないのは、実験に時間を取られるからでしょうか。

○委員発言

時間がないというのもあるが、我々理系の教員がそういう教育に至ってない。ボランティアの話が来ても文系の話だと認識している。

○久元喜造神戸市長

個別の話でいい気づきをいただいたのは、高校の先生方が探究のテーマを求めている。高校生に探究してほしいテーマが市役所には山ほどある。

例えば高校生の皆さんが近くの公園をこうしてほしいというような、公園に関する探究ってというのは、非常に面白いテーマ。うめきたの「グラングリーン大阪」が話題になっている。神戸のありようで都市の緑・都市の公園というのを大阪とは違うありようで作るということを、ぜひ高校生の皆さんに考えてほしいというのも非常に面白いテーマ。

教育長と小学生・中学生・高校生との意見交換をした際、「自由学習ができる学習のス

ペースを増やしてほしい」という意見が大変多かった。むしろ逆に、高校生の皆さんに自分の近くで、学習スペースはこんな場所があるかもしれないということを提案もらう、あるいはどんな雰囲気学習スペースがあったらいいかと提案してもらうっていうのもあるかもしれない。

わざわざボランティアをしたことを就職活動時にPRしなくても簡単に就職が決まるから、最近の学生はボランティア熱が非常に減っているという話は大変参考になった。

○委員発言

理系でも農学部だとちょっと違った様子がある。ある大学の農学部だと篠山とかにはすぐ入り込んでいて、もう学年の半分以上はボランティアで入り込んでいたりする。ボランティアへの対応は研究分野にもよる。

(2) 議論のテーマについて各委員からの意見聴取・議論

(幸福度の低さの要因とは)

○委員発言

国の平均値で相对比较して日本は低いという議論に果たしてどの程度意味があるのか。特に幸せでもないが、不幸でもないという方にどう働きかけたらいいのかと意識して議論しては。また、普通で十分と感じている人がいる中、「幸せでないといけない」という強迫観念的なものが働くと、今の若者は不幸だとか、かわいそうだとか、希望がないとか言うので、結果として幸せではないと捉えてしまう。

ユニセフの子供の幸福度調査で気になったのが「すぐに友達ができると答える日本人の子供が少ない」ということ。この結果が「子供たちのスキルが低い」という話なのか、それとも構造的に他者との距離感が遠いがゆえか、気になった。

○委員発言

東京一極集中が進む中で雇用機会も所得向上の機会も首都圏にあり、首都圏とその他という対立構造ができている。地方の問題が首都圏では可視化されず、他人事のように扱われてしまう。

希望を持って生きることが難しくなっている。学歴社会で単線型の、就活を成功させるのが良いという生き方をしていく。そこから外れたら、やはり疎外感や劣等感が生まれる。人それぞれの幸せ認知している国の幸福度が高い。

○委員発言

異文化とは外国のことで、日本の中に異文化がないと考えている学生が非常に多い。ほかの人が自分と違う価値観を持っているということに、言われて初めて気づく。学生は他人と自分をきちんと客観化できていない。社会に出るまで相対化してみることができな

い。そのため、他人と違うことを恐れ、我慢して、結果不幸になるのではないか。一方、30代から50代の幸福は社会とのかかわりの中での“幸せ”であり、世代によって何を幸せに思うかの基準は大きく違って来る。

国の開発度と幸福度の相関を調べた研究では、所得の低い国・中度の発展をしている国であれば1人当たりの所得向上により幸福度が高まる。高所得国、先進国では所得向上でも幸福度はそれほど高まらない。それとは別に政府（公共）の効率性が高くなれば幸福度は高まるという研究結果がある。

○委員発言

上り坂の時代は、物質的に豊かになりたいという気持ちを持ちながら幸福を目指していた。そのうち絆・信頼・共感とかいうところがだんだん失われていった。が、今度は絆や信頼が大事だということに気付いたところに日本の経済・社会が疲弊していった。

幸福度は心の問題、人と人との繋がりの問題が非常に大きなウエイトを占めるであろうと感じている。

子供時代に親が過干渉になっている。子どもが主体的に自分の人生を決めることができず、主体性の発揮が困難になっている。子供の時に感じていた幸福感はこの先の人生の幸福感のベースになる。また、大人も同調圧力あるいは周囲の空気感で主体性の発揮しにくいようなところがある。

日本全体は豊かになった。恵まれ過ぎた環境の中だからこそ、必死で幸福を追求するということをしなくなっている、渴望感というようなものが失われてきている。

ユングの考える幸福の五条件である「①健康②お金③豊かな人間関係④感動⑤朝起きることがあること」に照らし合わせてみると、日本全体の社会や経済が勤続疲労を起こしており、日本の社会・経済を再生させないとマイナス要素の方が多く、幸福とは言い難いと感じる。

○委員発言

我々の視点から見たら、今の若者はあまり幸福じゃない、夢を持ってないと感じる。我々が若い時に「こうなりたい」と思った夢を今の若者はほとんど持っていない。自分の将来像っていうのを抱きにくくなっている。

日本人は真ん中を好む傾向がある。幸福度とはデグリー。どうしても日本人は真ん中からちょっと上を選ぶ癖がある。

とはいうものの、私の学部の3年生、4年生、103人に「幸福ですか」と尋ねた結果は8割弱が幸福と回答している。若者なりの幸福があるのではないか。我々の感覚と若者のその幸福感とか孤独感の感覚というのはちょっと違う。どんなことに幸福を感じるかの質問には、「美味しいもの」「推しの活動」「家族と話す」といった身近なことの回答が多い。

○委員発言

親に余裕がなく、子供と向き合う時間が少ない。親は教員に置き換えてもいい。小学校、中学校、高校、さらに大学の教員も忙しくなっている。大学院では先生が忙しそうにしているので、論文を見てもらいにくいという声もある。

共働きの流れは止められないので共働きでもきちんと親が子供に向き合える社会を作ることが重要。労働時間規制・働き方改革が進んできたが、実態として、法律は全然守られていないという話も聞く。郊外から都心へ決められた時間に長時間の通勤をしていると疲れてしまい余裕がなくなる。

幸福感が客観的なものから主観的なものに変化し、曖昧なものになってきている。そのため、皆「それなりに幸福です」と回答する。一方で、明らかに格差は広がってきており、無視はできない。

○久元喜造神戸市長

どうして親が子供と向き合う時間が少ないのか。ユングの幸福の5条件にどうして当てはまらなくなってきたのか。結局、余裕がなくなっている。一億総疲労社会という人もいるが、どうして疲れるのかを考える必要がある。あたらしい社会事象が起きるたびに何らかの対応を迫られ、完璧に対応しようとすればするほどみんなが疲れてしまっている。

○委員発言

寛容性が下がっている。ネット上でも排除するような反応が結構ある。だから人々の自己肯定感が下がり、他者を受け入れる余裕がない。すごく幸せと感じる人もいる一方で、激しく相手を罵倒するみたいな感じもある。共感・シンパシーを醸成し、共感を得ることが大事。

○久元喜造神戸市長

前回の調査会で若者は7～8つのアバターを持っていて、インターネット上でコミュニケーションをとり、幸福感を感じているという話があった。一方で学生が孤立しているだとか、自分が感じていることを口に出して言えているのかなど違う見方もある。高校生・大学生の働く前の若者の幸福感・感性、若者世代の意識を理解し、彼らのニーズをとらえて、それを参画と市民自治につなげるのが非常に大事。

(インターネットを介したコミュニケーションと孤独感・幸福感の関係は?)

○委員発言

福田恆存(ふくだつねあり)のエッセイから拝借した「摩擦のない清潔さと貧しさ」と

いう表現。快樂と幸福は本質的に何が違うのかから論じている。快樂というのは物理的な豊かさ、あるいは苦しい思いをしないとか。トラブル、対立を避けていく、それが摩擦のないような生き方になって。かつ、清潔ってというのは、ある種の自己完結的なことであるが、その結果として貧しさが残る。それは孤立ということ。

経済の成長にはある種の快樂・欲望を若者に期待しているところがあるものの、そちらばかり傾倒していくと、本質的な社会との繋がりとか縁とか、そういったものが手薄になってくる中で、非常にバランスが難しい。

今の若者がなんとなく幸せに感じているというのは、前者の摩擦のない清潔、当たり障りがない距離感で自己完結的になんか幸せを享受している。一方で、それは孤立とか不幸なことと表裏一体と整理できる。

○委員発言

本学の新生が5月に一人でぼつんとしている。理由を聞くと友達ができない。なぜ友達ができないかという、入学してすぐにグループが固定してしまうため、新しい人がグループに入れにくい。

閉じられたネットワークの中では、学生たちは自分の言いたいこととか好きなことを話せるが、グループに入るきっかけを持ってない若者は排除されてしまい、結果として疎外感を感じている。結局大人がつなぐ役割を持つ必要がある。

大学に入るまでの教育の中で、多様性とか多文化共生の授業を受けているが、なかなか自分事としてそれらを感じられるような生活環境にはない可能性がある。先輩・親などから新しいことを教えてもらって初めて違う世界があることに気づいてグループが広がる。若い世代になればなるほど、閉じられた世界の中で示されたものに従って生きてきている。若い世代と、それ以外の世代とで、考え方・幸福度の断絶があるのではないかと感じる。

実社会同様にインターネットやSNS上のネットワークの閉じられた世界の中において若い人たちは幸福を感じているのではないか。一方、こういった技術を使って生活環境の拡充ができる人たちもいるのだから、要は技術とは使いようであるといえる。

○委員発言

若者たちも美味しいものを食べるとか温泉につかるとか、たわいもないことに幸福を感じながらも、本当の意味の幸福、マズローの言う欲求5段階説のなかで自己実現することか、誰かに貢献する、こういった役割について意識している人がどこまでいるのか。

若者は潜在的には孤独を感じているが、SNSを使うことによって一時的に孤独感を解放してもらっている。そういう意味での依存が多少出ているのではないか。

ネットにつながりすぎている時代だからこそリアルな体験を求めていきたいと思う若者もいる。リアルな感動を求めることは本当の意味での幸福につながるのではないか。

一方で、ネットにより孤独の解消はできると思うが、使い様によってははじめが生じたりして孤立を生じてしまいかねず、自分が主体となって使えるようマスターできていないといけない。

○委員発言

若い人にこのテーマで話を聞いてみた。ネット上では本当の自分でなくても生きていけるという答えであった。炎上を怖がる一方で、本当の自分を出さなくても生きていけるといふところに価値を見出す若者もいることがわかった。

一方で本当の自分を出せるところが多いことが本当の幸福とか孤独感の軽減につながるはず。ネット上でセルフブランディングして、よく見られたいと思いつき合う関係ではなく、リアルな自分を出せるところが多いことが、本当の幸福とか孤独感の軽減に繋がる。ネット上だけでは癒されない孤独感があるので、それを誰が繋ぐのか。それは、社会であり、私たちなど実体的な部分も大きいと思う。

インターネットのメリットはもちろんある。しかし、デジタル社会が進むとデジタルアクセスできる人・できない人で分断が起きるのではないか。

○委員発言

アンケートの結果では8割が幸福と感じている。孤独感に関しては、実は、孤独と感じていない、あまり感じていないというのが5割強。孤独を感じているのが2割強ぐらい。情報系の学生は1人ぼっちが当たり前で、1人に負担を感じないタイプが多い。

「どんな時幸福ですか」というアンケートの答えをワードクラウドで分析した。名詞では「ご飯」「睡眠」「ゲーム」「家族」「友達」といった単語がよく出てくる。あとは、「推しのライブ」とか。たわいもない感じ。動詞に関しては「寝る」「遊ぶ」「笑う」「食べる」。若者は8割方、幸せを感じている。さらには、たわいもないものに対して、身近なことに対して、幸せを感じている。

○委員発言

若者はSNSをきちんと使いこなせてない。スマホの長時間利用は悪影響が大きく、ルッキズムの助長もその悪影響の一つ。自分の意志でソフトウェアをインストールして機能を拡張できるPCの活用が望ましいが、授業をはじめ様々なサービスがスマートフォンやタブレットでも使えるようになってしまっているので、「使いこなせていない」。中学校の授業を見学したことがあるが、タブレット端末が単なる辞書になっているケースもあり、残念である。

私立大学には自宅生が多い。自宅生の比率は年々高くなっている。なぜなら、大学は早く学生を確保したい。さらに親は年内に進学先を決めたい。そうすると地元の大学に進学をする。“おな中”という言葉があるが、中学校からあるいは小学校から同じ友達同士のつ

ながりが強く、非常に狭い世界になってしまう。

狭い世界しか知らないのはまずいと思ってグループワークをすると、強い拒否感を示す学生もいる。ソーシャルスキルの低さが原因だろう。かといって、出欠は成績には直接反映されないのが欠席してもいいとは言えない状況があり、非常に対応が難しい。

背後には親の経済力の問題がありそうだ。どこでもいいから自宅から通える大学に行ってほしいと親に言われたと聞く。通学に2時間かける学生もいるが、そうすると朝起きることができない。授業に出席できない。通学時間が長くクラブ・サークルに入れない。

一昔前は就職活動がリクルート制で、ネットワークをつくるためにクラブ・サークルに入った。就職活動が自由応募制になり、クラブ・サークルに入らないため、人間関係もできない。

大学としても教職員は基礎ゼミやゼミで手取り足取り学習スキルを教えるようになったし、職員も学生と保護者には親切に対応している。しかし、これらの授業が必修でないと、学生時代から社会的に孤立する学生が出てくる。

親の経済力の問題、さらに何らかの精神上的課題を親も子も抱えていることが背景にあるのではないか。

募集停止する女子大・短大が出てくる一方で、四大はまだ存続している。でも、経営確保するために、今までは大学に来なかった層というのを取り込んでいることがある。

○委員発言

幸福感キーワードに、「食べ物」「友達」「ゲーム」といった要素があげられている。これらは刹那的な、一瞬の幸せである。一方で、例えば最新の自殺対策白書を見ると、10代の子の自殺だけがほかの世代に比べて増えており、一部の子供たちは、非常に厳しい状況に置かれているとも考えられる。やっぱり見えているデータだけではない背後にある何か状況を想像するというのも非常に大事。

○久元喜造神戸市長

大学によって、また学生によって非常に多様である。同時に、学生の貧困。子供の貧困は非常に大きな問題で散々庁内でも検討してきた。一方で、学生の貧困は、特にコロナの時に、アルバイト先が見つからない状況にあって、非常に疲弊・困窮している学生たちに対する対応を不十分ながらした。しかし、コロナ後もこの格差社会っていうのはあまり変わっていない。親の所得も増えていない、実質的に減っている中で、この学生の貧困という事柄について今日は話が出なかったが、学生の幸福感の減退につながっているのか。

○委員発言

これまで大学に進学しなかった層が今は大学全入時代ということで大学に入ってきている。フルに学費を払わなくてもいいような様々な奨学金制度もあり、20年・30年前と異なる。

り、所得が豊かでなくても大学に通わせることができている。一方で、学費を、あるいは学費以外の部分を自分でアルバイトして稼がないといけないという学生もいる。アルバイトを頑張りすぎると、勉強に集中できず、単位を落としてしまう負の循環が起きる。

○委員発言

130万の壁を越えてアルバイトをする学生もいる。そういった学生は、低時給のアルバイトを掛け持ちして長時間労働している。アルバイト先の手が足りないので、テスト期間前でもシフトを入れられることもあり、学業との両立が難しい。ある大学の先生からもシングルマザー家庭が増えたので、教科書を買わせられないという話を聞いた。「なんで教科書がタダじゃないんですか」と学生によく言われる。クラブ・サークルに入っていないので先輩からも教科書を譲ってもらえない。教員側も教科書を持ってくることを前提とした授業ができない難しさがある。

○委員発言

奨学金については返さなくていい奨学金がすごく減っている。借りてしまったら就職した後の20代、30代前半まで結構重荷になってくる。その辺も考えたほうがいい点ではあると思う。

○委員発言

年に何人が授業料を支払えずに退学する学生がいる。神戸市が中学進学時に制服を買えない家庭に対して補助をしていると聞いて驚いた。

○委員発言

コロナ禍で同窓会が支援するために困っている学生に名乗り出るように言った。すると全く手が上がらない。家庭が裕福で全然問題ないという家庭の学生が大半であった。受験は課金ゲームといわれるが、ある種の格差の固定化的を象徴していると感じた。

(3) 第3回の議論に向けての整理

○久元喜造神戸市長

市民自治とは「自治体が自治体としての意思を決定する際に、できるだけ様々な意見を出してもらい、できればただ言うだけではなくて様々な活動にも参画してもらい。参加する中で当事者意識を持った意見というものを大切にしながら、最終的にこの自治体としての意思決定につなげていく。」ということ。

1回目・2回目の議論で、若者を含めた市民の意識や、あるいは究極的には市民の幸福のために存在する自治体において、この幸福感に関する非常に多面的な議論をしていただいた。市民自治に繋げていく、言わば議論の架け橋をどう考えればいいのか。まだ整理で

きていないので、次回までに企画調整局と品田先生の間で整理をいただきたい。

○委員発言

どうすれば無関心を乗り越えるようなことができるのか。無関心が一番怖い。どう克服し、自分の街を愛するような気持ちを養うか。

○委員発言

若者世代は将来、今の大人の残していく色々な課題、昔から残されてきた課題の当事者になってしまう。若者自身が当事者意識を持つように、どういう風に市民自治を意識させていくのが大事。

○委員発言

当事者意識・共感・想像力が若い人たちにとっては難しいところがある。災害の時にはみんな助け合うのはなぜなのか考えてみた。災害の時は同じ立場に置かれる。平常時だとなかなかそういう想像が及ばず、やっぱ自分に完結してしまう。いかに共感・想像力を養うか、そこにはコンフリクトが伴うのでどう解決するかが重要。

○委員発言

野村総研の研究によると、「静かな地域愛着」という層がある。幸福度について8以上つけた層の3~4割が地域を愛しているけれども、特に意思表示もしないし地域活動しているわけではない。地域愛着が幸せを高めるけれども活動しない、でも活動するとさらに幸福度が高まるとしている。こうした層をターゲットにするのは重要ではないか。

地域では意見の対立が起こる時に、それを民主的に解決することが必要になる。現実社会にはそのためのルールや自治体・裁判所などがあるが、SNSの場合はルールが機能していないので、限られたコミュニティの中での幸せにしかない。仮にSNSやインターネット上にコンフリクトを調整するような機能が備われば、将来的には疑似的な社会が生まれるかもしれない。そういう可能性を考える上でのネットの活用というのは方向性としてはあるのかなと思う。

○委員発言

デジタルツイン上での市民自治とは何かというのを学生と一緒に考える。デジタル的なパンデミックが今起こっている中で、我々とは感覚の違う若者と一緒に、ネクストステップの市民自治について考える。

○委員発言

ヨーロッパのようなシチズンシップ教育を日本でも導入する試みがあるが、いろいろ違

うところもある。市役所は「困ったら行くところ」というイメージがあるので、困っていても繋がる何か、高大連携のボランティアのところに市役所的やNPO的なものがうまく関わってくことで、無関心・想像力の欠如が少し埋まってくるものと期待している。

○委員発言

(シチズンシップ) 教育については高校において主権者教育などでそういう動きはある。若者という点ではサイバー上、リアル、それぞれで自治への無関心さをどう乗り越えていくかの課題がある。

○品田裕座長

ゴールは、最後はその市民自治と学生、若者を結ぶ。両者を結ぶものとは何かと考える。

4. 閉会

次回調査会は令和6年10月30日(水曜)9時30分より市役所1号館14階AV1会議室で開催。